

許しのお茶

嬉野に移り住んで十数年が経った。

地元から引つ越した理由は「母」だ。母は今で言うなら、いわゆる『毒親』だった。その当時はそういった言葉もなく、ただ母から逃れたい一心で家族を巻き添えにして引つ越してきた。

幼少期、母は一度出て行ったら最後、何週間も何か月も帰ってこなかった。長い時には数年帰ってこない時もあった。母のいない日々は祖母と妹の三人で過ごしたが、祖母にさえ可愛がられることはなかった。祖母も母も、大柄で色黒な、可愛げのない私より、華奢で色白の、女の子らしい、私から見たら、あざとさを纏った妹を可愛がった。

私は五感を閉ざして幼少期を過ごした。暗く寒く寂しく、時には痛さもあり、いつも空腹な私は、辛い日々を乗り越える為に五感を封印した。その頃に嗅いだ匂い、感覚、大人に愛情を掛けてもらった記憶がない、暗黒の時代だ。

そんな幼少期から思春期が過ぎ、母も男を追っかける事に飽きたのか、私が高校一年を過ぎた頃に、実家に定住するようになった。相変わらず家にいないことが多かったが、ほぼ毎日帰って来た。年頃を迎えた私は、母の身勝手さに辟易していた。母の近くにいる限り、幼少期の辛い記憶を振り払うことが出来ないと考えた私は、高校卒業と同時に家を飛び出した。

母から離れた私は家庭を持った。子供を持てば、親の大変さも分かり、いつか私も母を許せる日が来ると思っていたが、それはむしろ逆で、わが子に注ぐ愛情の温もりは、そのまま母への憎しみを炙りだした。

この苦しみは母が生きている限り消えない。そう悟った私は、心の中で母を殺すことにした。親からの愛情を渴望していた幼少期にいつも家にいなかった母。母は出て行ったり帰って来なかったのだと自分に言い聞かせた。

母を心の中で抹殺してから、十数年、妹とは交流があったが、実家には帰らず、祖母の葬儀にも出なかった。母の近況は妹から聞いていた。祖母の死後、私達の実家である家・土地を巡って、互いに独り者の母と叔父が骨肉の争いをしていても聞いたが、私にとっては他人事だった。

私の生活を覆したのは、師走に入る頃に掛かってきた妹からの電話だ。妹の話では、まだ母と叔父は相続の件で揉めていた。同じ家にながら睨み合いの生活が苦しくなってきたらしく、母が実家を出たいと言っている。私は当然のように、母は妹が引き取り、そうになると、妹に負担を掛けることが申し訳なく思った。いくらかの経済的援助はしなければと、考えていたところ、妹がふいに「お母さんは姉ちゃんと暮らしたかってよ。」

最初は聞き間違いかと自分の耳を疑った。私には理解できない言葉だった。縁を切られた私に引き取ってもらえるとそんな図々しいことを思いつく神経が分からなかった。

正直言うと、選ばれたことに一抹の嬉しさはあった。子供の頃にあんなに欲しがった母の愛情。しかし、私への愛情から言い出したとは思えないし、学生二人を抱える妹に負担を掛けたくない、妹を思うが故の選択とも思えた。

離婚を経験し、子供達が成人し、やっと自由気ままな生活を手に入れた私に、母という大きな荷物を引き受ける気は全くなかった。だが、半ば強引に妹に押し切られる形で、殺したはずの母を蘇らせる羽目になった。私は、育ってきた環境にも関わらず、生来人が好いのだ。

しぶしぶ同居するようになって半年――。

朝、私が階段を降りると、母がお茶を淹れる。母にこんな習慣はなかった。茶処に住むようになって生まれた習慣なのだろう。

昨日、入荷したばかりの新茶を買って帰ると母は大層喜んだ。今朝、テーブルにつくですでに、湯呑みに入ったお茶が置いてあった。新緑の青が鮮やかで、香しい湯気が立ち上ってくる。毎晩大酒を喰らい、乾ききった私の体にそのお茶は、旨み、甘み、苦みが一斉に訴えかけてきて、今までの人生で、これほど美味しいと感じたのは、生まれて初めてだった。母が淹れてくれるからそう錯覚するのか。母によって失くした五感を、母の淹れた一杯で取り戻すことになるとは。

母は私の為に、毎朝お茶を淹れているのかもしれない。それは、母の贖罪か、それとも媚か。問うた事もないし、これからも尋ねない。しかし、この一杯のお茶が、母の所業を忘れさせる気にさせる。この土地、このお茶でなかったら、こんな気持ちは生まれなかったかもしれない。

明日も母は鼻歌を歌いながらお茶を淹れ、私はただ黙ってそれを飲むはずだ。母のちょっとした行いに日々いらつきながらも、毎朝お茶を飲むことでそれを忘れようとするのだ。母の淹れるお茶で五感を取り戻した私は、いつか母を許したいのだ。母と心から笑いながら「美味しかねー」とお茶を飲む朝を迎えたい。

遠くない日にその日が来ることを願いながら、明日も私はお茶を飲む。

いただきます。